

*本紙の特集事例をよりくわしく解説！あわせてご活用ください。

先生方へ
やまびこだより
No.141
今号の特集から

その時、子どもたちは……熊本地震の被災地から



岸本 晃 さん (株)プリズム代表取締役
(一社)八百万理事、NPO 法人くまもと未来理事長

今年4月に起きた熊本地震で益城町の自宅が被災し、避難所生活を余儀なくされた岸本晃さんは、住民ディレクターの手法を生かし、被災地の情報を発信し続けました。



中学生が団体にボランティアに駆け付ける (熊本市)

避難生活で元気つけられた子どもたちの姿

地震が起きて私たち家族は、熊本市内の県立第二高校グラウンドで11日間避難所生活をしました。

避難所で印象的だったのは、一生懸命手伝いをする高校生の姿です。避難してきた人や車の誘導をしたり、支援物資の食糧を配ったり、トイレの掃除や水くみをしていました。疲れもみせず、ニコニコした笑顔と大きな声で挨拶してくれる彼らに私たちは元気づけられましたね。

また、パソコンを使って避難所の車の台数などの状況管理をこなしていることにたいへん頼もしく感じました。

先生方の指導もあったのでしょけれど、統率がとれていて、先生と生徒との関係が良かったのだと思います。

今回被災したことで、避難所が立ち上がるプロセスを目の当たりにしましたが、学校と地域住民の間に良い関係が築かれていると、避難所の運営もスムーズになり、日頃からのつながりの大切さを実感しました。

中には問題が起きた避難所もいくつかあったようですが、幸い私たちの避難したところはうまくいったモデルケースだったと思います。

「日常の行動こそが、非常時に生きる」

スマートフォンで被災情報を発信していた仲間の家族は、畑に仮設トイレを作るなどのいろんな工夫をして災害に対処していました。倒壊しそうな家屋の“赤紙”や緊急地震速報に怯えていた2人の子供たち(小学生)も、両親と共に余った支援物資を届けるなどの手伝いをしていました。子供は大人の背中を見て育ちます。「家庭力」「地域力」と言ってもいいかもしれませんが、被災して得た経験がまたいつ役に立つ。彼らはきっと、地域を支えるリーダーとなるでしょう。

日常的に動いていれば、いざというとき、非日常で動くことができる。その意味でも子どもたちも「住民ディレクター」として地域の発信をしてほしいですね。

<住民ディレクターとは>

住民自身がテレビディレクターになり、スマホや携帯のカメラ、ビデオ機能を使って、まちのいいところや話題などを素材に撮影して番組を作り、発信するという活動です。地域の住民が番組制作を経験することで「企画力」や「人的ネットワーク」を培い、それらを地域の課題発見や解決につなげていこう、という取り組みです。

やまびこだより No.124「まちのお宝番組をつくらう!」ご参考ください。長野県社会福祉協議会のHPよりダウンロードできます。

防災教育に関する資料

●長野県教育委員会 HP

http://www.pref.nagano.lg.jp/kyoiku/hokenko/hoken/gakkoanzen/bosai.html

子どもたちの防災意識の向上のため、授業等で活用できる指導事例等「学校における防災教育の手引き」

学校の防災組織、災害が発生した時の対応方法、避難所としての対応例など7つのチェックポイントが提示

「市町村立小中学校における『防災計画』見直しの手引き」

●青少年赤十字防災教育プロジェクト

「まもるいのち ひろめるぼうさい」(日本赤十字社)

http://nisseki-jrc-bousai.com



青少年赤十字防災教育プロジェクト
「まもるいのち ひろめるぼうさい」
(日本赤十字社)

協力: 諏訪清陵高等学校、諏訪二葉高等学校、諏訪市教育委員会、長野県教育委員会、岸本晃さん

発行日: 平成28年9月20日 発行: 社会福祉法人 長野県社会福祉協議会 地域福祉部 ボランティア振興グループ
〒380-0928 長野市若里7-1-7 TEL.026-226-1882 FAX.026-228-0130
E-mail vcenter@nsyakyo.or.jp URL http://www.nsyakyo.or.jp/



ふっころ

防災を考えることは
自分たちの未来を考えること



自分たちが被災したらどうする?



諏訪地域の小中高生による
中高生防災フォーラムから

事例の概要

被災地の中高生と出会う

2016年9月、諏訪市文化センターに約60名の小中高生が集まり、「第2回中高生防災フォーラム」が開催されました。

諏訪市内の中高生が中心になって作るこのフォーラムでは、いざというときに「自分たちにできること」を中高生自身で考えています。

フォーラム開催のきっかけは、諏訪市と宮城県東松島市共催の「虹の架け橋プロジェクト」での被災地訪問です。「実際に東日本大震災の現地を見て、大きな衝撃を受けた。被災地の中高生から体験談や想いを聞いて、苦しいことを乗り越えたからこそその考え方ができると感じた」と当時諏訪清陵高校1年生だった和田臨渡さんは話します。「自分にもできることがあるのでは……」との思いから、一緒に参加した先輩たちとフォーラムを昨年初めて企画・開催しました。

震災時に避難所となった石巻西高校の齋藤幸男先生(当時教頭)のお話も、

諏訪の中高生に強い印象を与えました。

「今回の震災は、まさかねという大人の判断が被害を大きくした。大人は過去の経験を参考にするが、大人も経験したことのない時代が来ている。今は、子どもが“それでいいの?”と言える時代。あなたたちが大人と一緒に考えていかないと……」。自分事として防災を考えることは、故郷の未来、自分たちの未来を考えることだと齋藤先生は語ります。

自分事として、未来を考える

2年目となる今年のテーマは、「子どものチカラ」。「避難所で子どもたちの笑顔が周りを明るくした、勇気づけたという話を聞き、子どもにもできることがあるのだと感じました」と話すのは、第2回実行委員長の河西莉穂さん(諏訪二葉高校2年)。「子どもが立ち上がれば大人も立ち上がる。子どものチカラにも影響力があることに気付いてほしいです。フォーラムでは自分たちにできることを

考えるきっかけにしてもらいたいです」。

石巻からゲストとして参加した雁部那由多さん(石巻高校2年)と津田穂乃果さん(同)は、「語り部」として、震災当時小学生だった自身の体験を伝え続けています。語り部の活動を行うようになったのは、「虹の架け橋プロジェクト」がきっかけでした。生徒会として諏訪市の中高生と交流する中、「伝えることで自分たちが救える命があるのでは」と思い、活動を始めた」といいます。

「あの日を語ることは未来を語ること。防災とは郷土愛です」と話すのは、自身も娘を津波で亡くした元中学校教諭の佐藤敏郎さん(講師として参加)。「3.11は私たちの足かせではなく、これからどう生きるかの指針になっています」。

生まれ育った故郷のために、私たちには何ができるのか。自分自身のチカラに気付き、そして行動に移していく。小さな一歩の積み重ねが未来の地域を作っている。参加した子どもたちにも、大きなチカラがありました。



3・11は他人事じゃない! 子どものチカラは大切

中高生防災フォーラム in 諏訪

諏訪市の防災研修事業で東日本大震災の被災地を訪れた小中高生が実行委員会となって、子どもたち自身で防災を考える「防災フォーラム」を開いています。



第2回のフォーラムには、約60名の小中高生が参加し、それぞれのテーマについて意見を出し合い、考えました。

防災フォーラムで伝えたいこと

- 体験や教訓を、被災地・未災地同士で共有すること
- 私たちは「災間(災害と災害の間)を 生きている」こと
- 一人ひとりの意識と繋がり大切さ、災害で学んだことを生かす

中学生の自分にも
できることが
あるかなと思い、
参加しました。

フォーラム実行委員

昨年、中学生の時に被災地訪問に参加
内田 恩月さん (諏訪清陵高校1年)

震災が起きて、中学生だった自分には何ができるのか考えていました。実際に現地へ行かないとわからないことがたくさんあるし、機会があれば行きたいと思っていました。

被災地の中高校生に会って、まわりを動かす力や変えていける力があると感じました。齋藤先生のお話も聞いて、大人の指示に従うだけでなく、自分の意思で行動したいと思い、フォーラムにも参加することにしました。

中高生防災フォーラム顧問

石城 正志 先生 (諏訪清陵高等学校・附属中学校 校長)

自分の命は自分で守るしかない。自分の頭で考え、自分で判断して行動できるかどうか。それはすべての人間に必要なだと、大震災が教えてくれました。

参加した子たちは少数ですが、齋藤先生の想いに応えようと行動している。それは尊いことです。

フォーラムについてはできるだけ口を出さず、教育委員会へのお願いなども彼ら実行委員に任せています。子どもたちが自分で考えることで、大人が思いつかないような面白いものになると思っています。



いきさつ

2011 H23年

東日本大震災

2012 H24年

諏訪市教育委員会主催

齋藤幸男先生の講演会を開催

諏訪市の被災者支援の中で、教員らの個人的なつながりから、宮城県石巻西高等学校の齋藤幸男教頭先生(当時)の講演会を開催。



東北大学教育・学生支援部特任教授
前・石巻西高等学校長 齋藤幸男先生

震災時、石巻西高校は大震災後に避難場所となりました。非常時のときほど教育者としての人間性が現れるものです。当時の教職員は心を一つにして運営に当たってくれました。災害時において生徒や地域住民を守り抜く底力は、『防災の心構え』を日々の減災教育や万全の準備と訓練を積み重ねることで養われます。

子どもたちは災害の中で強くなった。「PTG(ポストトラウマティックグロウイング)、心的外傷後の成長」というものがありますが、悲しみを乗り越える力は子どもの方があると思います。



石巻西高校の生徒が齋藤先生を笑顔にしようと、全校生徒の笑顔写真を集めて似顔絵風に作ったモザイクアートも飾られました。

被災地を訪ねた諏訪の子どもたちに 齋藤幸男先生から提言

防災の問題は大人のいう事を聞いてればよいというわけではない。防災のことを考えることは自分たちの未来を考えること。大人に任せず、君たち自身で防災を考えてほしい!

齋藤先生の意向を受けて諏訪市の子どもたちと宮城県東松島市の子どもたちとの相互交流が始まる

2013~ H25年~

「虹の架け橋プロジェクト」

諏訪の小・中・高校生が被災地を訪問

「BOSAI ミライ交流 in SUWA」

被災地の子どもたちを諏訪に招待



東松島市の被災跡地を訪問

現地を見て衝撃

齋藤先生の
提言を受けて……

自分たちにもできることが
あるはず。やってみよう!

第1回フォーラム実行委員長
虹の架け橋プロジェクトリーダー
和田 臨渡くん (諏訪清陵高校3年)



被災地の中高校生から体験談や想いを聞いて、苦しいことを乗り越えたからこそその考え方ができる、人って変わるんだと感じました。

子どもが立ち上がれば大人も立ち上がる。子どものチカラにも影響力がある。そのことにも気づいてもらうことにフォーラムの意義があるんです。

2015 H27年

第1回 防災フォーラムを開催

● ワークショップで考えてみました!

- 学校以外で災害に遭ったらどうする?
- 自分の学校が避難所になったときに何ができる?
- 自分のクラスに被災地からの転校生が来たらどうする?
- ふだん、学校でできる防災教育は何がある?
- 学校や家に防災カレンダーを置くとしたら何を書く?

● 齋藤先生の講演会も開催しました。



テーマについて、一人ひとり自由に意見を出し合い、理解を深めるワールド・カフェで盛り上がりました。



塩害にあった土地で作った「わすれまい(米)」でお餅をつきました。

第2回 防災フォーラムを開催

2016 H28年



H28年度実行委員会の高校生メンバー

熊本の次は諏訪!?
他人事では
なくなってきている。

震災が起きた時、
「子どものチカラ」は
大切になってきます。

第2回フォーラム実行委員長
河西 莉穂さん (諏訪二葉高校2年)

同じことを繰り返さないためには、未来を担う子どもが中心になっていかなくてはいけないと思います。

フォーラムにはぜひ参加してほしい。そして、なんでもいいので学び取ってもらって、震災や防災について関心を持ってもらいたいです。

